

「イスラエル建国史」

2 啓蒙運動とユダヤ人解放

ユダヤ・中東研究家 滝川義人

著名なユダヤ人の出現

ユダヤ人社会での知名度はともかく、世界に名が知られるユダヤ人は、18世紀後半まで出現しない。それまで西、中部ヨーロッパでは、ユダヤ人は近代文化に統合されることはなく、その進歩発展への寄与も無理、と考えられていた。

例外はオランダ。哲学者スピノザ（1632-77）を生み出した。オランダは宗教上寛容な国で、異端審問でイベリア半島から逃れるユダヤ人あるいはマラノ（キリスト教改宗のユダヤ人）は、ここに安住の地を求め、ここで能力を発揮した。

オランダを除けば、ほかの地域のユダヤ人社会は、周辺部に押しやられた存在であり、個々人が実力を発揮する機会はなかった。風向きが変わってきたのは、18世紀後半になってから。世界的な知名度を持つ人物が、3名登場する。

ひとり、ドイツ出身の天文学者サー・ウィリアム・ハーシェル（1738-1822）。1781年に天王星、続いてその衛星チタニア、オベロンを発見し、天の川の円盤構造理論を提案した人物である。珍しい経歴の人で、音楽の才能を認められ、ハノーバー近衛連隊軍楽隊のオーボエ奏者に任命された。軍楽隊のイギリス派遣で、本人はそのまま現地にとどまり、音楽の仕事の続けながら、手製の10インチ天体望遠鏡で、天体観測を続けた。

1656年にユダヤ人の再定住を認めたイギリスでは、哲学者ジョン・ロックの『寛容の書簡』（1689）に見られるように、異質の存在を認める社会が、生まれつつあ

った。オランダもそうであるが、イギリスではスファルディ系が活躍し、ドイツ系のアシュケナジは後発組であった。

次はフランクフルト（アムマイン）のゲットーに生まれ育ったマイヤー・アムシエル（1744-1812）。ロスチャイルド家の初代といえば分かりやすい。古着屋から身をたて、ヘッセ・カッセルのヴィルヘルム大公に認められ、宮廷御用達の仕事をするようになる。

宮廷の財務を担当するユダヤ人（ホフユーデン）なら前にもいたが、その枠を越えて英仏等に繊維取引、証券取引、ワイン醸造等の事業を展開し、世界的な企業に発展させたのは、本人と子供たちの才能もあるが、ユダヤ人規制が緩和されてきた証拠である。ちなみにフランクフルト（アムマイン）ゲットーの壁は

1796年に崩され、外出

禁止日（キリスト教徒の祭日と日曜日）も廃止された。

第3の人物が、啓蒙時代の哲学者モーゼス・メンデルスゾーン（1729-1786）、作曲家メンデルスゾーンの祖父である。小柄な上ひどい猫背であった。14歳の時修学を決意し、筆写師の父の許を離れ、生地デッサ

ウからベルリンへ移った。郷里でタルムードの手ほどきを受けたダビッド・フレンケル師を頼って行ったのだが、師の助けを得て勉学に励み、カントやレッシングと肩を並べる啓蒙時代の哲学者、文芸批評家になった。

啓蒙思想とユダヤ人の解放18世紀に登場したヨーロッパの啓蒙思想家たちは、宗教的権威を否定し、人間的・合理的思惟の自律を唱え、ユダヤ人については、キリスト教徒の不寛容の犠牲者と考えた。そして、ユダヤ人も同じ人間性を有し、人権を持つと擁護したのである。

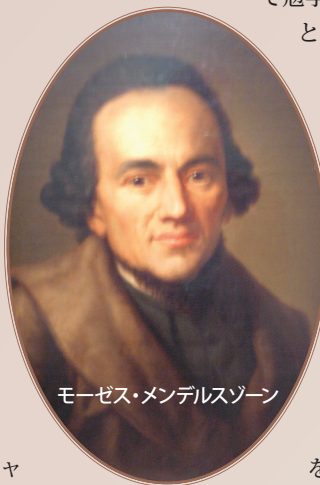
これに続く18世紀後半は、

ヨーロッパのユダヤ人社会に、ひとつの転機をもたらした時代である。ヨーロッパ諸国が、法制面でユダヤ人を解放したのである。すなわち、ユダヤ人に課せられていた不利な条件が取り除かれ、法の前の平等、平等な政治参加、居住と職業（公職を含む）選択の自由が認められた。

フランスでは、1789年の人権宣言の翌年、アビニヨンのユダヤ人社会、ボルドーのスファルディ系ユダヤ人社会、そして2年後にアルザス地方のドイツ系ユダヤ人社会に、これが適用された。19世紀後半になると、イタリア統一（1863）、オーストリア・ハンガリー帝国の成立（1867）、ドイツ帝国の誕生（1871）と、新しい体制のもとでユダヤ人が法律上解放された。

ユダヤ人は、普遍的寛容と人類皆同胞の夜明けとして、解放を歓迎した。これで分け隔てが打ち碎かれると期待したのである。

ユダヤ人の中の啓蒙運動キリスト教徒の間に生まれた啓蒙思想に少し遅れて、ユダヤ人の中にも啓蒙運動（ハスカラ）が、ベルリンで始まった。商業主義の



モーゼス・メンデルスゾーン



スピノザ



ウィリアム・ハーシェル

発展で、体制側に保護されたユダヤ人（シュツューデン）の間に小さい資本家クラスが生まれ、その中からヨーロッパの政治・社会思想を身につけた世俗文化人が育った。その代表格がモーゼス・メンデルスゾーンである（ユダヤ人には、あとひとつゲデュルデテューデンというカテゴリーがあった。存在を許容されたユダヤ人の意で、厳しい差別を受けた）。

メンデルスゾーンを初めマスキム（啓蒙された人々）は、ユダヤ人社会が、ゲットー的環境に閉塞している限り、世の中の進歩発展から取り残され、明日はないと主張し、そのために次の対策が必要とした。

1. 近代ヨーロッパ文化をユダヤ人の間に普及
2. 宗教と習慣の近代化
3. とりあえずヘブライ語を使って（まだ外国語を習得していない同胞には、ヘブライ語が手取り早いと考えた）教育し、その教育には、宗教教育だけでなく、理科や算数、地理その他社会科学を含める。

1750年、メンデルスゾーンは『倫理伝道』（Kohelet Musar）と題する定期刊行物を発行して、自説を展開しようとした。発行そのものはうまくいかなかったが、スペイン出身のユダヤ人哲学者マイモ

ニデス（1135-1204）の著書を論じた『論理学注解』（Millot haHiggayon）、そして1783年にだした『エルサレム』で主張が窺える。それは、非ユダヤ人に対して、ユダヤ人の信仰するユダヤ教が倫理と理性の教えであり、市民権を求める上で障害にならないと説き、ユダヤ人に対しては、啓蒙の文化はリベラルな人文主義で宗教的には中立、父祖の信仰と衝突せず、従ってユダヤ教を放棄するまでもない、と呼びかけている。

ユダヤ人を囲む一般社会が急に変わるわけではない。生身の人間としてユダヤ人を受け入れるにはまだ抵抗があった。生身のユダヤ人は不信と嫌悪をもって扱われ、ユダヤ教は頑迷な排他性を有する反社会的宗教とされ、国家の不協和音、分裂要因になると見なされた。

啓蒙思想の後に続くユダヤ人解放とは、簡単にいえば不快な要素（生活習慣等は醜悪と考えられた）を除去し、多数派文化へ改宗させることであった。そこには、市民としてなら受け入れるが、ユダヤ人としては受け入れないとする空気が残っていた。異質な存在としての市民は眼中にないのである。

近代ヨーロッパ文化を受け入れるのは、非ユダヤ人との知的文化的順応を必要と

する。当時ユダヤ人にとって、近代化とはとりもおさずキリスト教徒社会が主流を占めるヨーロッパへの適応、を意味した。それはユダヤ文化とユダヤ人社会の結びつきを薄め、周りの社会への同化を促した。

さらに宗教上は改革派の登場を促した。それは、ほかの宗教とは異なるユダヤ教の特徴をおさえて、倫理上のメッセージを強調し、シオンへの帰還の願いは「霊的エルサレム」の到来の願い、に解釈し直された。

東欧、ロシアの事情

東欧、ロシアには別の事情があった。ここには、世界のユダヤ人口の3分の2が居住し、大きな集団がコンパクトにまとまって生活していた。ユダヤ人社会は文化的社会的伝統で強く結びついていた。しかも周りは、西欧の啓蒙思想に触れておらず、ユダヤ人を同等者として受け入れることなど夢にも考えない環境があった。マスキムの集団「ヘブライ友の会」がドイツで発行する機関誌『集う人々』

（HaMeasseph 1783-1811）が一部の人に熱心に読まれ、ユダヤ人の間に啓蒙運動も起こった。自分の文化的環境から脱却できない旧世代の激しい反発もあったが、1880年代になって、啓蒙運動を根底から揺るがす大事件が次々と起きた。

